

マレーシア華人の言語と華文文学の調査報告

著者	今富 正巳
著者別名	IMATOMI Masami
雑誌名	アジア・アフリカ文化研究所研究年報
巻	17
ページ	1(196)-25(172)
発行年	1982
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00010224/



マレーシア華人の言語と華文 文学の調査報告

今 富 正 巳

1. 前 言

昨年にひきつづき、筆者は今年もマレーシアとシンガポールの両国に赴き、主として華人社会の言語と華文文学の状況についての調査を行った。本報告は、昨年度の本年報に発表したシンガポール華人の言語生活についての報告に続くものである。但し、この調査には東マレーシア地域は含まれていない。

本年の調査は、第一回が昭和57年3月10日から20日まで、第二回は8月21日から9月12日まで、合計33日間で、マレーシアには11日間滞在した。日数において少々シンガポールに偏していることについては反省しているが、調査の成果においては、新（シンガポール）と馬（マレーシア）の両国について大差はないと考えている。

文学活動は人類の生活の営みの中の一環であり、社会的な生産である。作家、出版社、書店、文学団体、学校、社会団体、読者などが影響しあった結果、作品はこの世に生れ出て人に読まれる。小さな国、小さな社会では特にそのことがはっきりとわかる。マレーシアやシンガポールの華人社会も、前者が人口300万、後者が190万ぐらいと考えればかなり小さな社会である。この地の華文文学について上記の観点からの総合的研究はこれまで報告されていない。

文学が言語を手段とする芸術であることは論をまたないが、マレーシアとシンガポールの言語、とくに華語をめぐる問題は極度に政治的である。故にこの地の華文文学の研究に当たっては、まず華語の問題をしっかりと研究する必要がある。

る。言語問題は華人の文学活動にも深い影響を与えている。

華語はマレーシアの政治的問題の中でも甚だ厄介な存在として、マレー人と華人の論争のたねになっているが、それがどんな訳で争点となるのか、充分に理解しておくべきであろう。

多民族国家ではとかく言語問題が原因になって、民族間の紛争を惹き起すものである。華人は特に自己の文化や文学を愛する伝統があり、これを中華思想ともいう。マレーシアの言語紛争には、このような華人の態度も関係している、マレー人も劣らずにこれに対して反応している。

そこで筆者は、マレーシアの華文文学——馬華文学という——の研究に当たっては、まず言語問題の基礎となるマレーシアの華人社会について検討し、次に華語をめぐる諸問題を整理しておいて最後に馬華文学の研究について述べることにした。馬華文学を知るためにはこのような総合的な方法と順序が特に有益と思われる。

調査は主として対象人物との面接聴き取り、資料蒐集、機関、学校の参観等の方法によったが、面接し教えを乞うたのは文学研究者、作家、出版業者、人民団体責任者、大学教員、教育界の指導者、実業家、新聞放送界指導者、公務員などであった。

面接した人々の意識・姿勢はいろいろな意味で保守から先進までさまざまあった。

この調査行で集まった資料には、文学作品、理論評論、雑誌、政府公刊資料、結社・団体・学校の出版物、それにシンガポール、マレーシアの他に台湾、香港で出版された同じ性格の資料

があるが、中国の資料は全く皆無である。

シンガポールの華語は第一級の公用語の地位を英語に奪われたものの、政府の確固たる方針と支持のもとで、華人社会の共通語としての地位を保っており、学校や職場での教育普及運動も顕著な成績を挙げている。華語にとって何よりの強みは、国民人口の76%を占める華人のほぼ全体の人口の支持を受けていること、またとにかく法的に公用語と認められていることであり、弱点は全国民の共通語として政府に認められた英語のような、強力な政治的背景と前途がないこと、これから社会に入っていく青少年の立身出世の為には華語の能力は決定的な要素ではあり得ないことなどである。

シンガポール政府は二言語政策のもとで、華人に英語と華語の習得を強く求めている。いわゆる華語とは中国大陆の普通語、台湾の国語に該当する共通語で、新、馬両国では Mandarin の訳語で示される。華語そのものは厳密には両国に住む華人の母語ではないので、華人は事実上、母語（方言）・英語・華語の三言語政策を要求されているのに等しい。この状況を改善するために、シンガポール政府は華語の母語化を長遠の目標として施策している。これは困難な大事業にはちがいないが、何と言ってもシンガポールの人口が適度に少ないこと、教育が普及していること、政府の施策が甚だ強力有効であり、それなりに説得力を具えていること、新しい方言母語人口の流入増加が完全に遮断され、方言グループの間の通婚が増えていることから、華語を母語とする人口は徐々に増えている。しかし全面的に華語化するのは何時の日か、それは予想もできない。

シンガポールの華文文学は、このような華語の状況を基盤にして存在している。むかしシンガポールがマレー半島に属していた1920年前後の頃から、馬華文学はこの地域の文学として人に知られていた。馬華文学の名は古い。ところが1965年シンガポールがマレーシアから分離して独立国となってからは、従来のように“馬華文学”として扱うわけには行かなくなった。シ

ンガポールとマレーシアは別の国になったので、その華文文学も少しずつ変化を始めるのは当然で、両国の華文文学をむかしと同様に一体視することは許されなくなった。

この両国の華文文学は異なる環境と条件のもとで望むと望まざるとにかかわらず、ちがった方向に進むことが予想される。

いまシンガポール政府は一定の方針のもとで華語の社会教育と学校教育に直接手を染めているが、華文文学運動に対しても一定の援助を与えている。しかし、文学の特質により、文学の援助と華語の推進の施策とが異なるのは当然である。文学活動への援助には、新聞社・文学団体・与党系人民団体、文化省などが力を貸している。1982年のみでも南洋商報社は文学全集として《吾土吾民(全六卷)》を出し、さらに同社は台湾方面の協力を得て《華文文学全集(全五卷)》を出した。また競争社の星洲日報も国際華文文芸賞なる国際的大会の開催を援助しているなどはすべてその実例である。

以上を概観すれば、シンガポールでは華語も華文文学もそれなりに、政府の方針施策や社会的な支援を得ながら進展していることがはっきりと認められる。

これに対して、マレーシアにおける華語と華文文学の状況は全く異り、甚だ酷い条件のもとで、前途を模索している。本報告は今まであまり明らかでなかったマレーシアの華語問題と華文文学の関係について具体的な材料を通してかなり明らかにすることができた。本報告には筆者の調査結果の他に、資料からの引用も含まれるが、それらは大体筆者が再調査し確認したものである。

2. マレーシアの華人社会

1970年の人口統計によれば、マレーシアの全人口 1045万人の中、マレー人は 469万人で全人口の46.8%、華人は 313万人で、全人口の 36.8%、インド人は93万人、9%である。数だけを見ればマレー人と華人は、その差は僅かに 150万、比率ではマレー人は、華人の1.4倍である。

また全人口数の中において、マレー人は全体の二分の一に満たず、華人は全体の三分の一を超えている。東マレーシアでは、華人と土着種族が主体で、マレー人の比率は更に低いので、東西マレーシアを併せて考えるならば、マレー人と華人の実感差は更に縮まるだろう。

1964年、即ちシンガポールとマレーシアが分離する直前のシンガポールを含んだマレー半島の人口について比較するならば、マレー人が40.6%であるのに対し華人は42.2%で華人の方が優勢であった。この数字を観察するならば、誰でも或る種の政治的な考察推測を為し得る筈である。結果として1965年にマレーシアはシンガポールを分離させたのであった。次に、マレーシア国内の地方各州におけるマレー人、華人の人口を対比して見ると、西マレーシア11州の中で、ジョホールはじめ8州ではマレー人の人口が優勢であるが、ペナン、ペラク、スランゴールの3州では華人人口が多いか対等である。もう少しこまかく比較すれば5州ではマレー人が絶対的に多数、2州ではマレー人が相対的に多数、3州では両者拮抗状態で、1州では華人が絶対的多数である。更に都市部での人口を観察するならば、別の特徴を見出すことができる。1957年の統計により2万人以上の人口を有する21の都市について観察するならば、19の都市では華人人口の方が多く、その中17都市では華人人口は過半数を超えている。1970年の統計によれば西マレーシアの都市総人口では華人は58.7%、マレー人は27.4%である。即ち華人は都市を支配して居り、それが華人に力を与えているしまった弱点ともなっている。単純な人口比の上で以上に述べた諸比較を加味すれば、マレーシアにおける華人とマレー人の間には種々雑多な政治問題、社会問題を招来する可能性があることが容易に理解されよう。もちろん、1981年と1982年に筆者が実際に大都市を観察した際、都市的職業へのマレー人男女の進出が著しいことを実感しており、情勢は変化に向っていることは否定できないが、上述の大局的数字が顕著に変動したとは考えられない。如上は数字につい

てのみ論考したが、そのうえもっと刺激的な政治、経済、社会、文化宗教問題等の要因も併せて考慮するならば、人種問題はより一層鮮烈さと深刻さを増すのは確かなことである。

では、華人とマレー人の関係はなぜ今日のような有様になったのか。その原因はこの地域の地理的条件やイギリス帝国主義の植民政策に求められるし、若干の近因は日本の占領にも求められる。何れにせよ、この地域の華人の存在の仕方や華人とマレー人の関係は両者の主観的な要求や願望の結果とばかりは言い難く、歴史的な経緯がある。今日のマレー人と華人は重い歴史の荷物を背負わされていると見るべきである。

イギリス帝国主義がマレー半島にゴムと錫を柱とする植民地を樹立して以後、華人は移民としてこの地に流入したが、イギリスは自己の利益のために大量の契約労働者(Contract Laborer)——いわゆる苦力——を招いた。これらの他に前借金でしばられた奴隷同様の者も多数あり、これら労働者のいる所、必然的に彼らを管理する制度としての暗黒勢力秘密結社——があったのは周知の事実である。イギリス帝国主義者はこの“制度”を含めた華人労働者を勤勉、能率的な労働力として歓迎する一方、マレー人に対しては低い評価を与えていた。このように最初“労働力”として流動的な存在でたった華人も、やがて工、商、農の生業をもつ移民として定住するようになった。この転換の時期は1930年代の世界恐慌、1933年に現地の“外国人条例”(The Aliens Ordinance of 1933)が出された頃からである。

中国本土の華人とマレー地区の交渉の迹を辿るならば、漢書に既に記載があるといわれるが、現実の華人社会について論ずる場合は、最近200年の期間について考えれば十分である。この間、先に述べた契約労働者や、誘拐と変らぬ扱いでいわゆる借貸券制度(Credit ticket System)のもとで南洋に送られた華人労働者たちは、故郷に錦を飾ることを夢にして働いた。マレーシア華人社会を特徴づける事象には秘密結社、ボ

スの支配する地縁血縁団体があった。また彼らが実際に遭遇した歴史的イベントとしては彼ら自身の定住移民への地位上昇、日中戦争、太平洋戦争、戦後の混乱、民族間の流血事件、マラヤ連邦の独立、華人主力のマレー共産党の叛乱と討伐、シンガポールの分離、マレー人優先政策下の再出発等々が挙げられる。筆者は、本調査の目的に鑑み、特に社团活動、教育制度、華人知識層の意識形態、民族主義などを重視している。

マレー人と華人の冷たい関係は、歴史的な所産であるが、実際にはどのような形、どのような内容をもっているのか、ここで観察しておく必要がある。

星洲日報によれば、マレーシア国民の職業状態を(1)農林漁業(2)鉱業採石業(3)製造業(4)建築業(5)電気・水力・衛生(6)輸送・貯蔵・通信(7)商業(8)サービス業に分類した場合、1970年の統計ではマレー人は(1)(5)(6)(8)の業種で多数を占め、華人は(2)(3)(4)(7)で多数を占めるという。換言すれば、マレー人の多くは農水産業や公共部門に集り、華人は製造業、建築業、商業、鉱業方面に多く集っている。この分類を個人経済の角度から眺めるならば、華人の経済生活が圧倒的に豊かになることは目に見えている。更に上記各業種への投資の状態に至っては全業種にわたって華人の方が上位である。大企業の資金を比較しても華人資本の方が大きい。土地を占有する農林大資本においても華人資本はマレー人資本よりも大きい。もともと工業と農業においては、イギリスを主とする外国資本が殆んど独占的な地歩を占めているが、第二位は華人で、マレー人は第三位である。商業従事者の人口では華人はマレー人の三倍半である。

これらを総合すれば、経済力において華人がマレー人よりも優れているのは多言を要さないし、個人的な収入面でも華人の方がマレー人よりもはるかに大きい。ある特定の分類法に従えば、全マレーシアの“貧窮家庭の84.5%がマレー人、0.6%が華人、4.9%がインド人である”といわれ、中産家庭については“31.6%がマレー人、55.7%が華人、12.1%がインド人”とい

われる。また富裕家庭については“12.1%がマレー人、52%が華人、17.3%がインド人”といわれる。その他の統計数字を併せて考慮するならば、マレー人社会は一般に貧しい者が多く、而もその中での貧富の懸隔が甚だしいのに対して、華人社会は一般にマレー人よりは豊かであり、その内部での貧富の分布は中間以上の層が厚い。都市と農村に分けて眺めるならば、極貧の人は農村に広く分布して居るが、農村こそはマレー人の居住地である。このような情勢の下で、当然多くのマレー人が積極的に都市に流入するが、これらマレー人の多くは都市貧民を形づくることになる。都市貧民には華人も居るが、貧窮の程度において最低の極貧者は少ない、このように見るとマレー人は全面的に劣悪な地位に置かれてしまうが、高級官僚から一般公務員に至るまでの政府職員、警察官、軍人は圧倒的多数がマレー人によって占められていることを無視してはならない。またブミプトラ政策の下で国内の大企業の理事者から従業員に至るまで、一定の比率でマレー人を参加させることが法的に定められている。《マレーシアのデイレンマ》の著者マハディール首相はその政策で一部にマレー人高給取りが出現するのは一見不当に見えるが過去の状態が不正なのであって、マレー人が良い地位に進出するのは本質的には不当ではないと主張している。

これまで述べて来た所で一応の区切りをつけて、筆者の所見を記すことにしたい。既に明らかになったように、マレーシアでは、国民の主要正統構成分子を自任するマレー人も、人口比において必ずしも華人に対して圧倒的多数を占めるわけではなく、経済的分野では華人の方が優勢富裕であり、マレー人はその劣勢をただ政治上の優勢で補うより他はない。総じて言えば個々のマレー人は貧乏であり、華人は豊かである。斯かる実情に対応するための宝刀として、マレー人がブミプトラを打ち出し、マハディール首相が《マレーシアのデイレンマ》を著すに至ったのはそれなりに理解できることであるし、また強度の政治的不公平を理由にして華人

が不満をもつこともそれなりに理解できることである。マレー人と華人はそれぞれの立場で不満をもっている。

さて、先述の経済上の貧富問題のみを強調して話を進めるならば、華人は富裕集団、マレー人は貧困集団というように図式化することもできる。階級分析に仮託するならば、華人は有産階級。資産階級が多く、マレー人は無産階級が多いということにもなろう。若しもマルクス主義的文芸理論を大雑把にここに持ちこむならば、マレー人大衆の側にプロレタリア文学の錦旗がはためくことになる。なお、マレー人の側には、若しも生活力や経済力の強い華人がマレー人と全く無差別に公民権を手に入れたなら、遂には華人が国を支配し、マレーシアは第二、第三の中国になってしまうかも知れないという伝統的な恐怖感がある。これはマレー人の脳裡を去らぬ悪夢である。旧宗主国イギリスでさえも戦前、戦後にわたり、同様の不安を抱いたらしく、イギリスはマレー半島を英中の勢力争いの場と考えていたふしがある。マレー人がこのような不安と恐怖を抱くことから、彼らが華人に対してそもそも好感をもっていないことが察せられる。加うるにイスラム教を国教として信奉するマレーシアで、非イスラム教徒たる華人の処遇においてさまざまな磨擦やみぞが生ずるのは当然である。1969年5月13日には両者の流血の衝突事件が発生したが、問題の本質は今日も解決はされてはいない。次に政治的支配力のあり方に重点をおいて考えるならば、華人は少数派であり、警察や軍隊などの国家機関の領域では殆んど無力であるうえ、マレー人優先政策の下で不平等の扱いを受けている。この面のみを視るならば、華人は被圧迫少数民族に他ならず、解放の為に努力しなければならない集団だということにもなるだろう。この局面にマルクス・レーニン主義や毛沢東思想を援用するならば、民族解放や圧迫反対を標榜する人民文学ぐらいが生れる理由は十分に具わっている。解決の難しい華人の処遇問題に直面しているこの社会の人々の中にも、さまざま態度や姿勢があり、筆者

は異ったいくつかの意見を聴くことができた。一般に言って華人の姿勢には保守派と先進派の両極があり、その間に若干の中間派がある。保守派と仮称される人々は、華人の習俗、文化、言語、宗教を愛し、華語の普及推進にも最も力を尽し、華文文学作品の閲読運動を推進し、書道、武術等のクラブも開く、相互扶助の為にも最も力を尽し、養老施設や墓地の管理、華人内部の紛争の調停、華人の持つ私立学校（独立学校という）への寄付金募集には最も奔走する、時にはグループで寺院を経営する、このような一派が同郷会館を柱とする地縁血縁団体グループで、ときには業縁団体もこれに加えられる。このグループは系譜的に眺めれば、華人がこの地に流入しはじめた18世紀頃に早くも出現した秘密結社の流れを汲むものと言える。ここでことわっておかねばならないが、秘密結社といえは恰も悪勢力の典型の如く受け取られやすいが、秘密結社は特定時期にはそれなりの存在理由があったのであり、その大部分はその後イギリス政府の指導の下で公然たる合法団体として同郷団体に転化したのである。また大半の社团は秘密結社時代が終ってから後に公然団体として創立されている。これについては呉華氏の労作《マレーシアの華人会館史略》を本年報に訳出しているので参照されたい。このグループは熱烈な同郷意識者の集団で、同郷会館の連合的活動が発展すれば次には華人全体の立場で考えるようになり、同郷次元を超える上級の組織として、各州の中華大会堂を持ち、また商工業界の上級社团組織として各州の中華総商會が作られる。この人達は、華人の利益や意志の卒直な代弁者である。このグループに同調するものとしては、華語学校の理事（董事）の連合会と總會、華語学校教師總會、台湾に留学した人々の友誼団体、南洋大学など諸学校の校友会、同窓会などがあり、かなりの数の文学者団体例えばマレーシア華文作家協會などもこれに含まれる。

また最近、同郷会館では会員が共同して一種の持株会社、企業会社を作ったり、或は同郷の

枠を越えて他の会館と共同で事業を企画したりする新しい動きが起って来た。マレー人の組織する新型の半公共的大企業が出現する今日、華人も旧来の個人営業的な発想と規模に停滞することは許されなくなった。

また華人の個人的資金を統一して新しい事業に挑戦することも増えて来た。マレーシア政府は、このような事業の大型化を奨励している。もう一つの新しい動きは、これら華人団体が法的に定められた懇親団体から、政治団体に登録変更をしはじめていることである。マレーシアの法律では懇親団体と政治団体の区別は厳格である。これら社團は華人の不利益を解消し、政府に対して自己主張するためには、政治団体に衣替えした方が手取り早いとするわけで、ここにもマレーシアの政治状況に対して素朴に反応するこのグループの気持が見られる。彼らを会館派華人グループと仮称する。

上記グループの対極に位置するものとして馬華公会 (Malayan Chinese Association・略称 MCA) がある。MCAは、マレー共産党の叛乱を含む戦後の極度の混乱のさなか、1949年華人の政治団体として陳禎禄氏らが主導して組織したものである。ところで陳氏に代表される華人集団は、英語教育を受けて成長した人が多く、従って植民地時代には英政府に受容された“高等華人”の集団である。これは前記の会館グループの表現をかりれば“華語のできない英語しかできない華人”ということになる。むろんこれは象徴的な言い方であり、今日のMCA幹部にすっかりあてはまるものでもないが、たしかにMCAの持っている体質を衝いている。MCAは成立の当初の目的は、共産党討伐の余波で強制移住させられた「新村」の華人を救済することであったが、当時の「緊急法令」によりすべての華人政治団体が解体させられ、華人の政治勢力がなくなった状況下で、やむをえず立ち上り、華人社会を代表して権利を勝ちとり、意見を述べるための政党として政治活動を始めたものである。この英語教育出身の知識層グループは1950年頃大体次の如き政治認識を持ってい

たといわれる。

(1)マラヤ共産党は敗北するだろう。(2)インドネシアの排華運動に鑑みマラヤ華人の前途を深く憂慮し、身を挺してマレー人政治家の穏健派と協力し、マラヤの独立を獲得し、華人とマレー人を互譲の精神で民主政治の枠組の中におさめなければならない。(3)マラヤにおいて華人は外来移民である。華人はこの地の環境に適応するように努力しこの地域の文化に帰属感をもち、政治的には忠誠を誓うべきである。(4)華人にとって焦眉の急は公民権を得ることで、公民権を獲得したならば、華人は徐々にこの国の国民の一部になり、マレー人と華人の矛盾も自然に解消して、華人はマラヤの地に永遠に生活することができるだろう。

上記の四項の中の(3)でMCAが自らを移民一二級国民の待遇を招き易いと認めたことは注目すべきことである。会館派はMCAのこのような態度に不満の者が多い。会館派にはマレー人もスマトラから移民して来たものであり、マレーシアの土着人とは一体何か、再検討をしようという者もないではない。

マラヤ連邦が独立したのは1957年8月31日のことであるが、それに先き立ち、MCAの英語的知識層は、マレー人上層部と協力し、政界にも地歩を固めつつ華人の地位を保全させようと希望した。彼らは英語的な近代的教養を誇りにし、自信を以って比較的大胆に“脱中国”を行ない、またマレー人との妥協融和を第一に考える傾向がある。この意味では、会館派グループとは明らかに対照的である。筆者は今夏MCAの文化関係の幹部と懇談したが、そのときの印象では、“華語のできない、英語しかできない”人にはめぐり合えず、この人たちは会館派グループの幹部に比し些かも劣らない華人的文化教養を身につけて居り、唯考え方において、少し視野が広く、マレー人政界と接触面が広いだけに問題を柔軟に展望する傾向があるのがめだった。

この意味では、会館派グループの知識人でも欧米留学出身者は少なくなく、流暢な英語を話

し、併せて華人的文化教養を身につけているのだから、この対照的両グループの個人個人の間には外見上の区別は求め難い。この両者のちがいは主として考え方の上にある。

一般に会館派は“MCA派の連中はマレー人のきげんをとるばかりで、余り華人の為にはなっていない”と批判的である。但し今年1982年の選挙だけは“MCAがめずらしく華人利益の擁護を訴えた”と皮肉をこめて述べていた。

さきに述べたように、MCAの心配など無視して、会館派グループの社団が続々と政治団体に衣替えすることに対して、MCA派は、これは徒らにマレー人側を刺激する短慮であるとして批判しているのを新聞紙上で見たことがある。両グループは一触即発とまでは行かないが所詮世界観、文化観の異なる、氷炭相容れない関係にある。MCAにして見れば、真に華人の前途を憂い、マレー政界の中で与党の一員として努力し、華人の利益を守護しているのはわれわれだとの誇りがあるであろうし、会館派グループの方では華人文化の伝承者はわれわれであり、これなくして何の華人ぞやの気概がある。筆者の見たところMCAの方が時代を先取りしているのは確かなようであるが、現実の華人の無視すべからざる“実力”を権力者に悟らせているのは会館グループ派であると思う。マレーシアの華語問題や華人とマレー人の矛盾の他に、華人内部の分裂対立があることに留意すべきである。両グループは、相容れざる二つの意識形態の下、余り交流もなく、何となく相手の存在を気にしながらも無視し合って暮しているといった状態である。しかし筆者が接した両派には共通した一点があった。それはこのマレー人優先政策、宗教上の非妥協性等々のため逼塞感に悩まされ、言語問題でも前途の光明は期待できず、見透しの難しい時代と環境の中で出口を模索する華人として“一体どうすればマレーシアで華人性を維持しながら地位を守れるのだろうか、何かうまい方法はないものだろうか”

という苦悩の末の発問であった。これはすべての華人知識層の共通のものであった。

だが問題ははっきりしている。華人性に拘泥せず、華語や漢字文化にも固執せず、マレー化しつつ華人習俗と意識のみを残して行くことで我慢するのか、それとも華人としてのアイデンティティを明確に保持し、華語や漢字文化を堅持するためにあらゆる試練に耐えて自己の主張を貫徹するのが、そしてそれは果して可能なのか、ということであろう。その何れが華人に幸せをもたらすものであり、何れがより現実的かは、にわかには回答し難い。これは華人にとっては正に生死の関頭に立つ思いの問題であろう。逆に言えば、今日のマレーシア華人が妙に人をひきつける魅力を持っているのは、彼ら一人一人がこのような活きた歴史的問題に直面し、求道者にも似た真剣な悩みをもち、この問題の為には心をむなしくして真理を求めている、その真摯な生活態度の為かも知れない。

以上述べて来たことを、要約するならば、マレーシア華人は、歴史的に遺された民族問題を背負わされており、現実の政治生活の中では極めて不利な条件を押しつけられながら、ただ全人口の中で占める36.8%という比較的大きく、具体的な数字のみをより所として、自己の存在感と帰属感を求めつつ彷徨しているといえる。華人はたしかに大都市に集り、大厦高樓をつくり、企業、大商店を維持しており、酒樓は毎夜超満員で、ネオンは夜空に輝いている。しかし華人の心に一步踏みこめば、不安と苦悩が満ちている。抽象的な価値である“体面”でさえも最早や保ち難い程の境地に追いこまれている。通俗的に言えば“体面”であるが、“人間の尊厳”と言い換えてもよい。この国に二級国民という法的な制度はないかも知れないが、現実にはそれが無いとは言えない。だがどういふものか、これを正面からとりあげた文学作品は少ない。いや、とりあげ難いのであろうか。

3. マレーシア華人と華語問題

マレーシアやシンガポールの華人がよく“華

人は華語と不可分だ。華語は華人の魂である” “華人が華語を失えば世界の尊敬を失う” というのを聴く、新馬両国の華人の住むところ “多講華語少説方言” のスローガンが必らず見られる。特にマレーシアでは華語をめぐる問題、華語の教育の問題は民族間の紛争の焦点になっている。マレー人から見れば、言語の問題は法的に解決した問題であろうが、華人にとっては最も今日的な政治上の課題である。複数民族国家には複数言語が存在するもので、その国ではとかく言語についての紛争が発生しやすい。マレーシアにあっても言語上の対立紛争は、解決の見込みもはっきりしないまま、異常ともいべき長期にわたって執拗に続いている。法的に結着し、憲法にも明文規定された言語問題は、現在マレーシアでは敏感問題(Senssibility Issue)とされて、みだりに口の端に上らせることも許されない。しかし、36.8%の華人、またこれを内包するマレーシア社会にとって、華語問題は無視し得ぬ現実の問題であるのはまぎれもない事実である。

言語の原理的な理解のしかたにおいて、筆者は“言語は支配者による国家支配の道具であり、人間の政治社会生活の一部である”。“支配のため、行政のために共通のことが必要である、言語は単に隣人どうしのコミュニケーションのためにだけあるのではない” “ことに他の民族を配下に組入れたときは、道理を説いて服従させなければならぬ。その行政のために共通語が必要である” “国の統一と団結のためには共通語が必要である” といった側面を承認すべきだと思う。つまり、“言語は自然に発生したものではなく、人間が社会を作り、特定の者が他に命令し支配するために作られていった「もの」である。とりわけ共通語は人為的な加工品であり、行政を推進するための必須の道具である。共通語は権力体制に奉仕するためのもの” という性質がある。上述の説は、言語の発生過程や共通語の生成について重要な側面を述べたものではあるが、今日の時代の複数言語国家における共通語問題にも適用される原理である。

マレーシアにおける言語問題もこの原理の例外ではないが、現代は太古の言語発生時代と同じではなく、政治のありかたも大昔とはちがううえ、多数派のマレー人が46.7%、少数派の華人が36.8%という僅差で競りあって居り、その上この地区には言語問題のみならず、その他の独自の歴史的事情があり、しかも華人は自己の文化や文学に強い自負心をもっているの、早急に解決しそうにはない。前章で述べたように、すべての華人がこの問題ではいまでも絶望せず、解決を模索しつつ苦悩のさなかにある。

1957年マラヤ連邦が独立し、マレー人が国家の主人の地位に就いたとき、マレー語も“国家の象徴”(トウング・ラーマン)ということになったが、このとき以来華語の地位をどうするかはマレー人、華人の間の激しい議論の対象となって来た。

華人社会の指導的勢力には由来二つの派があることは既に述べたが両派の指導者の華語の地位についての見解は全く異なるので、華語の地位を争取するための運動においても両派の指導者はしばしば対立抗争することになり、華人社会の政治的主張もときには、真二つに分裂するほどの危機に見舞われた。言語の問題はまず学校教育のあり方についての論議と切り離せないもので、マレーシア地域における学校の実情を回顧しながら事柄の根源を理解して見たい。

植民地時代、イギリス政府はマレー人の為にマレー語初等学校を設立し、学校から1マイル半以内の距離に住む男子児童に義務教育を課した。その目的は活力ある農民の育成にあった。またインド人の多い農園にも学校を設け英語またはインド方言を授業した。その他の重要都市にも英語学校や私立の教会系学校があった。ところが、イギリス政府は華人のために華語学校の設置など考えたことは一度もなかった。華人子弟は英語学校に入ればよいとした。前章で触れたように、華人社会は1930年代に入ってから流動的な労働力中心の社会から定住する移民社会に移行したのであるから、それ以前の華人社会は流動性が高く、平均年令も高く、イギリス

政府も彼らのために学校体系を考えようとしなかったのである。しかし、1911年に辛亥革命が成功をおさめ、中華民国が実現するや、民族主義と共々新しい教育理念がマレーの華人社会にも入って来た。この時代的潮流の影響を受け、規模の大小はともかくとして1918年全マレー半島に華語の小学校と中学校は300校に達し、1957年には華語小学校は、1330校に達し、この中46校には中学（高校を含む）が併設されていた。この時期華人学生はおよそ40万人、英語校に学ぶ華人学生も8万人以上であった。

このような華人教育の隆盛はイギリス人の不安を呼ぶに十分であった。不安は主として次の二点である。(1)華語教育体系はイギリス政府の計画立案下の産物ではなく、中国革命の浪がマレーの華人社会におしよせた結果である。(2)華語教育の急速な進展はマレーにおける華人社会の実力を反映するものとして受け取られ、イギリス人がコントロールできなくなることを心配した。この事実直面したイギリスは種々の制約を設けてこれを抑制支配する他に手はなかった。それ故に華語教育はイギリス人にとっては文化問題である以上に政治問題たる性格を濃く具えているのは明らかである。イギリス人は華語教育は華人社会と中国本国をつなぐ好ましからざる紐帯であると認定したのである。

考えて見ると、マレーを支配した諸国は何れも似たような考え方に立ち、似たような対策を講じて来たことがわかる。すなわち、イギリスばかりでなく、日本がマレーを支配した時代には、華語校はすべて封鎖され、一部だけが残されて日本語を教えた。1948年にマレー共産党が武力叛乱を起したとき、マレー殖民政府当局は緊急状態法令を出し、すかさず212の華語校を封鎖したといわれる。現在も、マレーシアの華語系学校は好ましからざる存在として、国民学校（マレー化教育の学校）に変換するよう、強い指導を受けている。

1957年にマレーシアが独立したとき、この国は“基本的にマレー人の国家”“国語はマレー語”とされた。これに対する華人勢力の会館派、

MCA派、シンガポール人民行動党（PAP）などはそれぞれちがった意見を示したが、共通していたのはマレー語を国語とすることには賛成するが、何らかの形で華語も公用語として認めさせ、華語学校も継続させるべきだということなのであった。上述三種類の華人のうち、陳修信、李光耀らに代表されるMCAとPAPの二者は、この両氏自身英語教育出身なので、華語に対しては余り未練がなく、その上彼らは権力に近い立場なので華語学校特有の中華主義や共産主義には反対であった。この二派は選挙民の手前、華語を残せと主張したがその本心は“マレー語を国語として認めるが、実際には英語を公用と学術上の言語とし、華語は一般社会での流通に限るべきである”といった所であった。これを評して“小学校程度の華語、中高大学程度の英語、政治的要求に叶うマレー語”ということだと見る説もある。これに対して、前記した会館派グループは熱烈な華語擁護派で、華語教育は自己の文化の継承の成否にかかはる大問題と考える。彼らは中華文化の伝統に誇りを持ち、その優越性を信じており、華語教育を捨てるのは自殺的行為であると考えている。この考え方の当否は別に議論のある所であろうが、圧倒的多数の華人はこの考えに近いのである。これらの華人はマレー語も英語も余りできないので、直接に議員として政治に参加して活動はできないが、選挙のときは彼らは最も大きな票田の主である。そこで、英語教育出身の華人指導者も票を確保するためには、この大衆の民意に耳を傾けざるを得ない。英語出身の華人指導者と正式の政治の場に地位を持たず、政界の圏外におかれている華語教育出身の指導者は、言語問題に関する限り、互に全く異なる見解を持っており、歩みよりの可能性は殆んど無い。前者は政府の政策に従うが、華人大衆の支持と共鳴はなかなか得られない。後者は政府に対する影響力は強くないが大衆の強い支持を得ている。この結果、言語問題について、華人社会は常に意見が割れてしまい、結果として、華人の力を弱め、マレー人の要求に対して、一致して当るべき力を

弱めてきた。それにもかかわらず、華人社会は二十余年にわたって、華語の地位獲得の為に長期持久の闘いを続けて来たとし、これから先きも続ける構えを見せている。従ってMCAの政治家達もこれら華人大衆の意志を尊重しながら、なるべく政治活動をせざるを得ないことになる。

華語についての華人の粘り強い態度は、当然反射的にマレー人側のより強硬な国語政策の実行を招来することになる。マレー人は、華人が政府の言語政策に反対することはとりもなおさず“マレーシアの国家的象徴への反対”と受け取る。またマレー人は“憲法を作るとき、マレー人とMCAは話し合の結果、華人にも公民権を与え、その代りとしてマレー語を国語として認めたのではないか、今日に及んで華人が華語問題を持ち出すのは背信行為であると感じている。

なおマレー語政策の背後にはもう一つの遠大な構想があるといわれる。すなわち、マレー語を唯一の国語にすることにより、マレーシア・インドネシア両国の言語の合一化が実現し、その結果中国の影響を排除することができるというものである。マレー人にとって、マレーシアの華人は好ましくない巨大な勢力であり、これに対処するためにはインドネシアの同族語民族の協力を得て自己の力を増強し、華人に対して優位に立ち、国内の民族問題を有利に解決しようとして願っているといわれている。

マレーシアでマレー語の地位を確立することは東南アジアにマレー世界を樹立する第一歩だともいわれる。1972年からマレーシアとインドネシアは、マレー語による長期的な合一化計画を進めている。マレーシア側では言語図書研究所、デワン・パハサ・ダンプスタカがこれに当たっている。

ここで、マレー化教育の目的を達成するための根幹となる学校教育体系について検討しよう。

1956年文部大臣ラザク氏（後の首相）は教育に関する報告《ラザク報告書》を発表したが、その中で“マラヤ連邦の教育政策の中での最も大きな目標は、すべての小学校と中学校をマラ

ヤ化の方向に発展させることである”と述べている。

1960年文相ラーマン・タリブは《教育政策検討委員会報告書、タリブ報告》を発表し《ラザク報告書》の具体的実行方策を示した。それは次のように述べている。

(1)小学校は次の2種類とする。

- ①マレー語を教育用語とする国民学校
- ②英語・華語・タミール語を教育用語とする国民型学校。

この2つは政府が経費を負担する、6年制義務教育である。

(2)中学校は次の3種類とする。

- ①国民中学・マレー語を教育用語とする、政府経営の公立学校で、学費全免とする。
- ②国民型中学・政府が経費を負担する私立学校で、英語又はマレー語を教育用語とする。若干の学費を徴収する。
- ③独立中学・全く政府の経費援助を受けない私立中学、どんな言語で教育してもよいが、政府の監督管理は受ける。

(3)今後政府が挙行する国家的資格試験は主として英語又はマレー語を用いる。

《タリブ報告》の中の要点は卒業資格などの国家試験をやめたこと、高校を2年制にして華語校を国民型中学に吸収したことである。特に共通試験の廃止に因り、華語中学は完全に教育体系の外部にはみ出してしまった。この措置は華人政界にも大混乱と紛争の種子を播いたが、MCAはこのときも華人大衆の非難を浴び、華人のために何もしないどころか、華人の運動に敵対したとして責められている。1961年には有名な教育法令21条B項が公布された。これは“文相は適当なときに国民型学校を国民学校に改めることができる”というもので、華語の学校は将来存在できなくなることを意味していたので華人はその撤廃を強く要求した。

1962年、政府は《タリブ報告書》にもとづき制度を次のように改変した。

(1)小学校を2種類に分け、一つを国民学校とし、マレー語を教育用語とし、英語を第二用

語とし6年制とする。もう一つを国民型学校と称し英語・華語・タミール語を主要用語とするが1年から6年までマレー語を必修とする。尚華語とタミール語の学校は3年生から4年間英語をやる。これは政府が経費を負担し、児童の学費は全免とする。

(2) 中学教育は次の2種類とする。

- ① 国民中学・マレー語と英語を教育用語とする。初級中学(中学校程度)は3年制、高級中学(高校程度)は2年ずつ前後2段階に分ける。学費は全免とする。
- ② 国民型中学・もとの華語(英語・タミール語)の私立校を政府の全額経費負担に改めたもので、教育用語はマレー語と英語とする。

なお華語・タミール語系の小学校のマレー語の学力は国民学校・英語校よりも低いという理由で、小学校と中学校の間に1年間の補習班を設置した。大学は3年制なので、華語校出身者は全課程を終えるのに14年、マレー語・英語校出身者は13年である。

この措置の結果華語中学は次の3種類になった。何れも1961年の数字である。

- ① 一部経費を政府が負担するもの37校。
- ② 全額政府負担するもの13校。
- ③ 全額民間負担の独立中学43校。

その後、政府の強力な指導の下に①から②に変換するように指導された。但し15人以上の父兄の要求があれば課外授業として華語(タミール語)の授業課目を置くことができる。今日独立中学は政府の監督は受けるが、公式の教育体系の枠外に置かれ、政府の統計資料からは一切姿を消すことになった。

マレー政府がこのように電光石火の勢いで教育制度の改変を実行できたのは、華人社会の与論が分裂していたからだともいわれる。1964年の選挙から、1967年国語法案発効まで、華人は華語を公用語、準公用語にすべく運動を続けた。1965年華人はすべての社団を動員して華語を公用語に列するように政府に要求したが、マレー人もこの動きに対抗して、National Language

Action Front(国語行動陣線)を組織して政府の後盾となった。この時点でマレー人と華人の対立は公然たる争いに発展した。このとき、“マレー人を中軸にして、3民族を団結させよう”の方針をうたつて来た共産党でさえも、華語教育体系の存続と発展をたたかいとろうと叫ぶに至った。この当時MCAはマレー語を唯一の公用語とすることを再確認し、一方で教育の場における華語の地位を保証させることを主張したが、これを生ぬるいとして反対した指導者沈慕羽らはMCAから除名された。華語問題はいつも華人社会にも激動をもたらすのである。1967年に国語法案が発効したが、この中に“各州政府は公用文書をその他の種族の言語に翻訳し意思を通ずることができる”の文言があるので、実質的に華語は“公用応用語”の地位を得ているようにも見えるが、法的に確かなものではない。

国語法案の発効を機に、沈慕羽らを中心に華語による独立大学設立が発議された。マレー政府のマレー化教育政策のもとで、いっそのこと小学校から大学までの一貫した華語私学体系を樹立しようという計画である。独立大学構想こそは戦後マレーシア華人を最も興奮させた事件であり、1968年4月14日に199の社団代表が集って発起人大会を開いたが、全マレーシア各地の四千に上るありとあらゆる団体が、恩讎をこえて署名してこれを支援したといわれる。この思い出を筆者に語るとき、多くの華人が“平素必ずしも団結していない華人社会も何か重大問題に臨んだときは、一致してことに当るものである”と華人一体感の健在を誇っていた。

独立大学問題の発議はシンガポールに設立された南洋大学に次いで二回目である。南洋大学は華人領袖陳六使が1954年にシンガポールに設立した私立大学で氏は南大設立の主旨について“……これによりマラヤ政權を掌握する人材を育成するのである……然らざればシンガポールマレーシア800万の人口が二三十年後には1000万人にもなり、華人人口が70~80%になろうとも、永遠に他人の支配下の屈辱に甘んじなければならず、永久に解放の日は見ないであろう”

(当時は新・馬分離以前である)と述べたが、この発言からこれが多民族多言語国家での華語教育問題である以上にすぐれて政治問題であることが理解される。上述の独立大学問題が文化的に大学などと無縁な華人大衆を興奮させる理由もここにあるし、マレーシア政府が華語問題に関する限り異様なまでに果敢で素早い反応を示す理由もここにある。李光耀はシンガポールで政府を握った後も、南洋大学が華語を教育用語から除くように執拗に要求し、1975年3月に至り、南大の用語を華語から英語に改めることに成功した。南大はその後70年代末に廃校となり、教員は国立大学に吸収されたが、その教員も逐次にそこから去りつつある。

南洋大学の前例があるだけに、マレーシアでの独立大学運動がうまく行かないだろうということは誰にも自明のことであったが、政府当局は1969年5月8日の選挙直前には独立大学が株式会社の名義で登録することを拒否することはできなかった。しかし、同年5月13日に「五一三・流血事件」が起ったので事態は一転して最悪の状態になり、民族対立の険悪な空気の中で独立大学の声は消えてしまう。五一三事件はマレー人対華人の力関係のさま変りを促した大事件であった。五一三事件の後、華人は益々不利に

なる。

マレーシア政府は言語と教育の面で、更に画一的マレー化を実行すべく決意し“土着人文化を真髄とする国家文化を創造する”ことを目標にすると決定した。

1971年から統一的国家試験(マレーシアでは中学、高校と小学校の卒業段階で政府が試験する)の用語を英語から完全にマレー語に変えたので多数の華人学生が落第し、華人子弟の学生は大幅に大学進学之机をせまめられた。次に大学高専の入学定員にはじめから華人学生の入学者数に制限的な枠を設けたので、華人学生は更に門戸が狭くなった。三番目の措置はマレー語小学校の拡大と華語(タミール語)小学校の縮小である。これにより、学制の根底部分から学生の比率を改めようというものであった。試みに学校数を比較すると、1957年以前皆無であったマレー中学校は1974年に324校を算え、1980年には英語校(実質的にはマレー校と同じ内容)と併せて760校になるものと予測された。それに反して華語校は増加せず、むしろ減少している。

しかし、学業成績の面では華人学生は必らずしも劣っていない。次に1974年の全国五大学の及第者数を示すと(表1)の通りである。

(表1) 1974年マレーシア全国五大学入学者の実態

種 族 校 別	土 着 人		華 人		印 度 人		其 他		総 数	
	合 格	落 第	合 格	落 第	合 格	落 第	合 格	落 第	合 格	落 第
マラヤ大学	1,260	846	1,184	736	175	111	42	46	2,661	1,739
%	47.4		44.5		6.6		1.6		100	
国民大学	731	555	46	29	13	5	2	4	792	593
%	92.3		5.6		1.6		0.03		100	
理科大学	412	843	429	933	47	82	23	20	911	1,878
%	45.2		47.1		5.2		2.5		100	
農業大学	60	7,292	143	2,225	34	368	1	13	238	9,898
%	25.2		60.1		14.3		0.4		100	
国家工芸学院	868	1,609	65	558	9	52	0	10	942	2,229
%	92.1		6.9		1.0		0		100	
人 数	3,331	11,145	1,867	4,481	278	618	68	93	5,544	16,337
百 分 率	23.0	77.0	29.4	70.6	31.0	69.0	42.2	57.8	25.3	74.7
	100		100		100		100		100	

説 明:土着人とはマレー人はじめ各種原住民を指す
資料出処:1974, 7.30, シンガポール《星洲日報》

この表で土着人（マレー人）の志願者数は14476人で3331人が合格し、合格率は23%である。華人の場合志願者数6348人で、合格者は1867人で合格率は29.4%、以下インド人が31%、その他種族が42.2%となっている。

なお、実質上マレー人の他は殆んど収容しな

い大学も若干あるので、この比較の内容は更に変わって来る。

国内の大学に入学できない華人学生に残された路は海外留学である。（表2）はその状況を示すものである。

（表2）1975年の学生数の調査表

	土 着 人	華 人	インド人その他	総 数
国内五大学進学者	11,220	4,943	839	17,002
国内専門学校	7,577	4,142	254	11,973
国内総数	18,797	9,085	1,093	28,975
海外留学生（南洋大学、台湾、セイロンの大学を含まない）	5,250	20,810	5,840	31,900
総計人数	24,047	29,895	5,933	60,875
%	39.5	49.1	11.4	100

資料出処：1975. 12. 3. シンガポール《南洋商報》

華人海外留学生は大部分が自費生であるが、この状態が続けばマレー人は国内大学に入り、その他は海外に留学するという形が固定化するかも知れない。このことの当否は別にして、結果としてマレー人学生を増やす政策と整合する。

1982年8月マレーシアのマハディール首相は、華人領袖との紙上対談で華人子弟の海外留学には“留学”の他に潜在的な海外移住の性格があり、若し良い職業がみつければ、華人学生は、再びマレーシアに帰らない。（これを外流という）。このように自己の祖国に愛情も乏しいので華人は真の国民として信頼されないのだと指摘していた。この主張にも一理はあるが、自己の故郷としてマレーシアを愛している華人も筆者は知っている。但し子弟の外流を容認している華人父兄がいるのも事実である。親兄弟が世界の各地に分散して活路を求める華人の生活哲学は、マハディール首相にとっては、一種の容認し難い非愛国的なものであったのだろう。

学校教育の場で、マレーシア政府がマレー化を進めるもう一つの有効な方法は、教師の資格条件を難かしくすることである。1969年3月、政府はケンブリッジ資格証明書またはマレーシア国家資格試験（高校2年修了の段階での国家試験）の及第と専門訓練の課程の修了を小学校教員の最低条件とすることにした。二つの資格試験はマレー語と英語によって実施されたので、結果として華語教師とタミール語教師の大部分25,000人が資格を失うことになった。政府は教師の再教育を実施して、3年以内に前記資格試験の再試験をして、資格を取らせようとしたが、華人社会はこれに反対し、3年の期限を撤廃させた。しかし、この資格を取得していない教師の給料は有資格者の下に置かれた。

1969年以降この制度は厳格に実施されたが、この条件に叶う華語教師は却って実力が低く、華語教育の質はこの面からも低下して行った。

1970年に文部省は新たな語文課程綱要を制定し、小学校5年で検定試験をするようにした。

これに対応するには、華語小学校の授業時間数では絶対にマレー小学校に追いつかないので、マレー語の時間を増やすために華語の時間を減少せざるを得なくなった。

また、政府は本来私立学校である国民型小学校と同中学校の理事会を無力化することにも成功した。理事会は華語学校の経費を調達し、華人社会と学校を結び紐帯になり、教員任免権も持っていたが、マレーシア政府は、学校の資産の権利、教員の任免権、校務の監督権等のすべてを奪い、理事会の権限を施設の拡張、福祉業務等に限定し、資金面での援助はさせるが監督権のないものとした。その結果国民型学校は実質的に国民学校と変らないものになった。これにより華語学校と華人社会のつながりは断たれてしまった。それ以後、政府は華語のできない華人教員を校長に任命することも可能になった。このように華語小学校は現在事実上国民型から国民学校へ移行しつつある。華人学生は生涯のうち、小学校6年間の学習を除いては、その後の公立中学高校で華語漢文学習をする機会はない。このような状況の下で、独立中学は華人にとって大きな意義を持つことになる。

急劇な教育制度改革は華語教育、華人社会に大きな衝撃を与えた。何よりも、華人は政府の意図をはじめから疑い、政府に従順にしたがって、それに見合った利益を得られないのではないか、政府の態度はマレー人の利益を重視し過ぎるという不満を抱くに至った。各段階での統一的国家試験のマレー語の問題が益々難しくなってくるのも、真意は華人学生をしめ出すためではないかと疑っている。現在、マレーシアの公立中学校（含高校）は急速に増加しているので教師も足りず、いろいろな問題があるが、このような状況の中で、独立中学は華人社会の要求を満たすべく一定の努力を行ないそれなりの成果を挙げている。筆者はジョホールにある寛柔中学を訪問し、黄継翔校長の説明を受けたが、マレーシア随一の名門である本校に寄せるジョールールの華人社会の熱意と期待は正に真剣なものがあり、華人社団、事業家からの寄付金は必

要なだけ得られる態勢にあり、短大程度の専攻部もあった。勿論、このような応援に力をいれるのは会館派グループの人々である。独立中学は一定の学力を保つために全国的な独中卒業生の統一資格試験を1975年から実施している。現在全国に42校の完全な形（3・3制）の独立中学があるが、若し華語小学校が変質すれば、入学する学生の来源がなくなり、従って学校の継続が不可能になるおそれがある。ゆえに今日、“華人小学校の変質に反対”が華人社会の最も大きなスローガンである。華人小学校には曲りなりに華語があり、華人教員が華語で授業することも認められている。華人小学校こそは華人社会にとって自己の文化を維持する最後の砦である。しかし、華語学校の華語の授業時間も多くなく、従来の常識から見れば、華人学童の華語能力の低下は著しい。このときに華人社会の期待にこたえるのが同郷会館をはじめとする諸団体の文化活動で、華語補習班、書道クラブ、伝統的中国音楽・舞踏クラブ、武術クラブ、作文コンクール、弁論大会などがさかんに開かれる。会館が金を出して学生の作文を集めて出版するなどには既に日常的行事になっている。マレーシアの華人社団はそのような方面で、今後の存続と発展の可能性がある。但し、MCAに言わせると、この活動は散漫で無組織的で、熱意はあるが効果は不十分だと批判している。

直面する困難に対応して、1975年、全国華校理事總會（董総）と全国華校教師總會（教総）等は全国の各社団を率いて《閣僚級教育検討委員会に送る覚え書》を呈し、同じくMCAも《マレーシアの教育制度を検討する覚え書》を政府に呈した。前者ははっきりと“三種の語文教育（マレー・英・華）”を唱え、“国語（マレー語）は必修科目であるが、教育と試験の主要用語としての母語を犠牲にしないこと”と主張しているのに対し、MCA側は“国語（マレー語）は主要教育用語ではあるが、唯一の教育用語とすべきではない”と言い、“理科・数学は英語で教え、マレーシアの歴史・地理はマレー語でやればよい”と主張している。ここでも判

るように、華語教育界の指導者とMCAの間にはやはり大きなひらきがあり、MCAの考え方はシンガポールの李光耀らPAPの考え方に近いことは明らかである。

なお先きに述べたように、南洋大学が英語大学に変質したことは、マレーシア華人に大きな衝撃を与えた。それまでマレーシアの独立中学の卒業生にとって南大は華文大学として有力な進学先だったからである。そこで、MCAとPAPの言語政策は既述したように英語第一、華語第二、マレー語第三の考え方がうかがわれるが、この考え方は会館派グループの考え方とは絶対に相容れない。よく言われるように、戦前は東南アジアの華人領袖は民族意識が強く、公益に熱心な人が多かった。例えば商会主席、華語校理事長、戦争時代の救国総会会長など皆このタイプであって、植民地政府に忠実な者などは軽蔑されたものである。しかし戦後になるとこの古い型の指導者は新しい独立国からは疑われ嫌われ、それに代って“現地政府当局好み”の華人領袖が現れて来た。彼らの多くは高級知識分子で、現地の言語がよく出来て、現地の政治活動に参加し、現地政府と協力し、その信任を受けている。しかし、彼らが華人大衆の支持を受けるかどうかは別である。

華語問題は“民族主義型”指導者に代表される考え方と、“現地好み型”指導者の考え方の間の闘いになっている。長期の観点で眺めれば、この政治闘争は多分後者の勝利で終るであろうと見る人が多く、華語問題の前途もその意味である程度予測できるとする向きもある。

それならば華人が政府の意を容れて言語的にマレー人と同一化したとして、それですべての面でマレー人と対等の権利を獲得し、一切の問題が解決するのであろうか。多分そのあとにも別の問題が材料となって差別不平等は続くと考えた方がよさそうである。すなわち、言語の争いは民族問題の当面の焦点になっているが、それだけですべてが結着するわけでもない。

イスラムに囲まれたシンガポールを維持するために、李光耀が巧みな施策のもとに、英語化

路線を進んでいるのはまことに賢明なことと言はねばならぬが、これは国土が極めて小さく、人口も少ないからにはじめて為し得たことである。マレーシアのように、国土が大きく、華人人口も相対的に少なく、その上選挙制度上華人が不利な条件の下で、MCAがPAPのやり方を模倣しても恐らく成功はしないだろう。

一方、民族型指導者は歴史にその名を残すことは確かであるが、この言語の争いで勝利を収めることは難しく、おそらく、悲劇的英雄として終るものと見られる。筆者は民族型指導者と、MCA型指導者の双方に会ったが、両者とも華語や華人文化のこれからの有り方については、見通しがたらず、困惑していた。

政府の施策の結果、街頭で人の目につく広告などはマレー語が多くなり、クアラルンプル市や地方都市の開発区の商店、医院、工場等々の看板はマレー語が主になり、漢字は無いが、有っても小さく制限されている。しかし、この国に暮す華人がすべて華語を失ない、マレー語のみを語り合うといった情景を筆者はとても予想できない。

社会言語学的に眺望すれば、マレーシア華人の未来図はババに似てくるかも知れない、またババの存在を好ましい前例として誇示した若い華人記者もいた。しかし華語は一定の教養や文化として存続するであろう。特にシンガポールに安定した華語文化圏が存続する限り、近隣地域たるマレーシアの華人に一定の影響を与えるに違いない。この意味で、PAPは華語にとって次善の策を選んだ結果、却って華語の相対的安定をもたらし、而も隣国マレーシアの華語文化にも間接的に良い影響を与えることになる。

マレーシアの華人には長期的にマレー語を受け容れる傾向の下でババの如き華人が徐々に増えるであろうが、少なくとも華語の口頭語は更に長期に亘って残るにちがいない。また高度な華語文化・文芸・大衆芸能はかなりの数の華人の教養として維持されるであろう。華語の方言文化もシンガポールよりは更に強い力で残ると見られる。

ここで考慮すべきは中国大陆・香港・台湾の存在である。マレーシアはそれら及びシンガポールの影響を南北から受け、一部の華人は依然高度の華語の文化教養を維持するであろう。

現在の条件を見るならば、華語の前途は明るいものではないが、しかし絶望的ではない。“華人文化的教養人”“馬華文学愛好者”といわれる人々が健在であるならば希望はある。この人達の文学的創造の分量の大小は問うところではなく、華人社会に伝統的な文化を愛する層即ち“士”“読書人”が出現したことに意義がある。彼らは華人の伝統的生き方や理念を具現する人々である。堅韌な読書人が存在しさえすれば、華人文化は相当な危機の下でも維持されるものである。若しもマレーシア華人社会にこの“士”や“読書人”が生成する前に今日の如き言語問題が起っておれば、華語の危機はより大きかったと思われる。

少くとも、華語文化を教養として維持することに無上の価値を置く階層が組織的に存在している（それは会館、MCA派を問わない）ことは、華語文化が簡単に消滅しないことを保証している。という見方もある。

ここで、忘れずに述べておきたいが、マレーシアを故郷とし、祖国とするといっているにもかかわらず、華人の生活態度は必ずしもそれに適した最善万全のものではない。1982年8月31日、筆者はクアラルンプルで独立記念日の行事や行進を密集した大衆の中で揉まれながら参観し撮影した。ところが、この日見物する市民大衆の中には華人の数は極めて少なかった。華人はクアラルンプル市民の過半数を占める筈であるが、この国家行事に関心を持ち参観に来た華人の数は、人口比に比して余りにも少なかった。一方マレー人やインド人は、別段動員されたのでもないらしいが大変な人出である。

パレードの中には華人の民族舞踊隊の団が居た。元首の前で表敬演舞しながら行進する予定であったが、直前になって、華人の民族舞踊は禁止され、この一団は民族舞踊の衣裳を着け

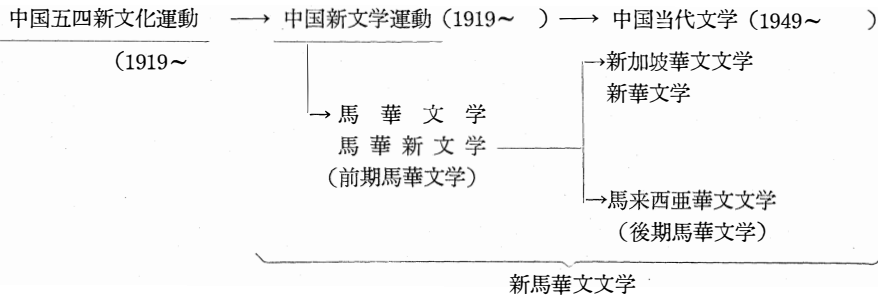
たまま、黙って静かに行進し通過するより他はなかった。華語新聞は直ちに筆を揃えて、これを不当な圧迫として非難し、MCAも当局に抗議書を出した。

この事件が暗示する意味は大きく、この背景には多くのことがひそんでいる。華人は、この日なにものかを自ら捨て、またなにものかを奪われたのである。

華語の問題は、マレーシアに生きる華人社会の諸問題の集中的な表現であり、政治の頂点に位置する問題である。華語をめぐる環境・条件に明るい要素は一つもなく、長い眼で眺めれば後退の一途あるのみだが、幸いにも華人社会に士大夫、文人階層が生成されたので、危機の中にも華語文化は“教養”としてかなりの生命を保つものとする。しかし、この国々に住む華人が根本的に反省すべき点もないわけではない。マハディール首相の“マレーのディレンマ”に対して、華人ははっきり回答をしなければならない。

4. マレーシア華文文学の概況

馬華文学（馬來の華文文学の略称馬華新文学ともいう）は五四文化運動を源流とすると、あるいは中国新文学の支流であると言われて来た。1965年にマレーシアとシンガポールが分離したため、両地共通の文学であった馬華文学はマレーシア華文文学（これを後期馬華文学と仮称する）とシンガポール華文文学（新加坡華文文学・新華文学ともいう）の二つに分れた。故に分離前の馬華文学を前期馬華文学と仮称する。なお、今日のシンガポール・マレーシアの華文文学の総称として新馬華文文学というが、依然として、慢然と馬華文学ということが多い。馬華文学の名は人々にとっては捨て難い愛称となっているので、本報告も馬華文学ということがある。これらの名称は、まぎらしいので、判り易い表にして次に示した。



馬華文学の定義について、当代隨一の老研究家方修氏は“中国の新文学運動の影響下において、反帝國主義反封建主義の精神に基づきシンガポール、マラヤに興った華文口語文学”と述べ、また現在マレーシア作家協会会長の方北方氏は“シンガポールにあるとマレーシアにあるとを問わず、華語を表現の手段にして、シンガポール或はマレーシア社会を反映した作品が即ち馬華文学である”，と述べている。ペナンに住む華語文壇の元老温梓川氏は、何語で書いてもよい、マレーシアを題材にした作品はすべてマレーシア文学であり、たまたま華語で書かれたものが馬華文学ということになる。またそれは何国人が、何処の土地で執筆しようとも差支のないことだ、と語った。後で明らかになるが、これらの発言にはかなり重い意味がある。馬華文学の発展段階についても大体次の如き定説があるその代表的なものとして、④マレー作家協会秘書林明水氏と⑥方修氏の所説を紹介する。両氏とも面接懇談の機会を持った人である。

④(1)1919～1925, 萌芽期

- (2)1925～1931, 南洋新興文学運動期
- (3)1931～1936, 低潮期
- (4)1937～1942, 抗戦文学運動期
- (5)1942～1945, 被占領期
- (6)1945～1948, 中興期
- (7)1948～1953, 緊急(状態)期
- (8)1953～1956, 反黄(反低俗)運動期
- (9)1957～1959, 沈滞期
- (10)1960～1964, 復興期
- (11)1965～1974, 低潮期
- (12)1975～1980, 覚醒期

⑥(1)1919～1925, 萌芽期

- (2)1925～1931, 拡張発展期
- (3)1932～1936, 低潮期
- (4)1942～1942, 隆盛期
- (5)1942～1945, 被占領期
- (6)1945～1948, 高潮期
- (7)1948～1953, 緊張状態期
- (8)1953～1956, 反黄運動期
- (9)1957～1965, 復興期
- (10)1965～1976, 低潮期

④と⑥は基本的に同じであるが、⑥が一般に定説の原型となっている。しかし、1965年以後を方修氏は低潮期として否定的に扱っているのに対して、林明水氏は低潮期・覚醒期に分けている。これは方修氏の文学観を反映していることと、方修氏の住むシンガポールと林明水氏の住むマレーシアの状況のちがいを反映した結果と考えられる。

シンガポール大学の◎楊松年氏は、次のように時期を区分した。

◎(1)1919～1924, 僑民思想濃厚期

- (2)1925～1926, 南洋思想萌芽期
- (3)1927～1933, 南洋色彩提倡期
- (4)1934～1936, マラヤの地方性提起期
- (5)1937～1942, 故郷意識の挫折期
(1942～1945)
- (6)1946～1949, 馬華文学の独自性主張期
- (7)1949年以降, 新中国の成立に因り, シンガポール・マレーシアと大陸の関係は一応断絶し, ここから新馬華文文学は自己の進むべき路を模索しつつ発展した。
- (8)1955～1959年に見られた愛国主義的文学は

この地区人民のアイデンティティが、益々強まって来た証左である。

(9)1965年の独立以降はシンガポールではこの共和国の国民の立場で、シンガポール文芸の形成が始っている。

三者に共通しているのは、最終の部分を除いて、一期の長さがおしなべて1年、2年から5年というように極めて短いことである。文学運動史の時期区分としては異様な程小刻みであるが、これはとりもなおさずこの地域の政治・経済・社会・文化・大衆生活などが、急速な調子で変化してきたことの反映に他ならない。筆者が関係する“マレーシア・シンガポール華人社会の変貌の研究”の総合的課題の立場から見れば、“変貌”はまさに集中的にこれらの時期区分に反映しているといえよう。

つぎに、④⑤と⑥は区分をする思想の上で稍異なる傾向があることがうかがわれる。すなわち、④⑤からは中国新文学の影響下に誕生した馬華新文学を、中国本土や華人の政治・外交・戦争の変化を反映する馬華新文学、華民族意識を反映する馬華新文学というように稍々政治中心的に考える傾向がうかがわれる。しかし⑥の思想によれば、同じく華人文学ではあっても、本土に根をもつ華僑——僑民——中国人的な立場から漠然たる南洋的な立場に移行し、更にそこから南洋の地方性の自覚が強まり、ついで限定されたマラヤの地方性が強調せられ、終に馬華文学をはっきりと自覚するに至る。そして本土大陸との絶縁、独立を意識し、この土地この国の民——吾土吾民——を基盤にしてナショナリズムを確立しようと努力し、今日ではこの共和国の国民としてのアイデンティティを強化しつつ、シンガポール文芸の確立に向って発展すると闡明している。すなわち、⑥では濃厚な中国人的色彩、僑民意識が段階的に稀薄になり、替ってシンガポール国民意識が濃厚になってゆく、僑民性の濃淡の移り変りの中に時代区分の標準を求める方法である。落葉帰根から落地生根への思想的転換過程は、それなりに華人に思想上の負担を強いた。苦痛を伴うこのような負

担は、そのまま文学運動の活力源ともなるのであるが、④⑤⑥三つ分類法にはやはりこの種の苦痛が反映されている。

なお、資料によれば方修氏は“植民地の政治経済情勢が動揺し、あるいは社会運動が高揚したとき、馬華文学は短期的な繁栄を迎え、文学史上の高潮期をつくる。逆に植民地統治が相対的に強化され、あるいは社会運動が一段落を告げると馬華新文学ははっきりした停滞を示す。五十余年馬華新文学は高潮期は比較的短く、低潮期の方が長い。収獲は短い高潮期に多く、高潮期は前後四回を記録するのみ”と述べているが、筆者も氏から同じ発言を聞いた。そのとき、氏は“華人にとって相対的に苦難、激変の時代は文学活動は活発で、相対的安定期には活動は沈滞する”とも述べていた。また、氏は現実主義文学の立場に立ち、“一定の社会的意識を持たねば作品の価値は低い。安定し満足した社会に浸りながら作られる消閑文学は本来馬華新文学としての鑑賞の対象に入らない”とも述べた。それ故に先に述べたように氏によれば1965年以降は低潮期として片づけられるし、一方逆境の中、華人の地位確保の為に激しい運動をしている現在のマレーシア華人社会には良い文学が生れる可能性があるわけである。

前記したように、方北方氏は今日のマレーシアの華文文学とシンガポールの華文文学の一体性を強調している。温梓川氏に至っては国籍性などは超越している。一方楊松年氏ははっきりとシンガポール一国のことと割切る方向にある。また林明水氏の属するマレーシア作家協会の若い作家たちは、“馬華文芸はマレーシア文学の一環である”という意見をもっている。ここでいうマレーシア文学にはマレー人の作るマレー語文学や他の言語の文学も含むので、シンガポール華文文学との一体性を看取することはできない。

しかしながら、シンガポール、マレーシアの両国を通じて個別的な面接懇談から得た印象では、両国の華人は作家に限らず一般に一体感を持っていた。それは、政治的には二国家に分離

されたが、華人の現実の生活の中では、公私の両面にわたり一体的な人間関係が残っているからである。シンガポール華人の多くはマレーシアの地域で育っており、従って友人、親戚の多くがマレーシアに住み、マレーシアの事情に関心が深い。故にシンガポール作家の作品でも、マレーシアを舞台にすることが多い。現在、マレーシアとシンガポールの華人は両国が分離したにもかかわらず、お互をタイやインドネシアのような外国に住む人と認めることに慣れず、一種独特の親近感をもっている。永い将来においては、形式的にも精神的にもはっきりと相互に異国化するであろうし、そのことが両地の華文文学の性格づけの上で大きな影響を及ぼすのであるが、今日の状態から見て、華文文学活動の上での両地域の未分化状態はなお暫く続くであろう。現在、シンガポールとマレーシアの間の書籍の輸出入は驚くほどに不自由であり、相互の情報の流通は極めて限られている。しかしそれにもかかはらず、関係者は依然として両国華人人口の合計を以て華文文学の市場人口と見なす傾向が強い。

1971年の統計に基けばシンガポール華人の人口はおよそ185万人、マレーシアの華人人口はおよそ313万人であり合計およそ500万人弱である。この人口は決して大きいものではなく、その上に香港、台湾、中国大陸など強力な文化勢力、書籍出版源を近くに控え、それらからの輸出の波をかぶりながら新馬両国がそれぞれに自己の文学を創り、文芸を築き、出版文化を維持しているのは、全く偉大なこととして、敬服に値する。一体華人社会は本来そのような志向をもっているのだろうか。このことについては華人自身の間にも積極と消極の二つの見方がある。積極的に肯定する側は、これまでの華人社会は教育事業に力を尽して来たぐらいであるから、勿論自己の文化的伝統を発揚するにちがいないと主張する。一方の否定派は、もしも華人社会が真に馬華文芸を愛し、関心を抱いているのならば、馬華文学の作品がさっぱり売れないのは如何なるわけなのか。街の本屋に並んでいるのは殆ん

ど低俗読物ばかりだ。堂々たる馬華文学作家も、ついにそこらの映画スターや歌手にもかなわない、これが華人社会の実態だと主張する。この二つの見方にはそれぞれ一面の道理がある。

マレーシアやシンガポールの華人社会は、特異な歴史的事情により、金銭第一の商人的社会としての性格が極めて濃い。社団にあっても、財力があってこそ幹部指導者になり得るという通念がある。このような環境の下で文学や文芸が、高い地位を得るのは難しいことであった。ところがその後華人社会には新しい価値観が芽ばえ始めて来た。マレーシアという国家の中でマレー人や他種族と共存し、単に経済のみならず、政治、文化、社会、言語等のすべての面で摩擦を強いられるに及び華人は自らの文化を自覚しなければならなくなった。またこの地の200年に及ぶ華人生活史の結果として、読書人階層を生み出すまでに至った。ここに華人社会は内部に土農工商を階層としてかかえるようになった。この点はシンガポールも同様である。

だが今日マレーシアやシンガポールには文芸創作のみによって生活を維持できる職業的作家は存在し得ない。文芸作品の出版にはマレーシアでは大体次の五つの形がある。

- ①新聞社が出版する。例えば《南洋商報文芸叢書》がある。
- ②比較的大規模な出版社が出版する。これには文芸叢書という形で一連の作品を出すことがある。
- ③数人の作家が協力して出版社をつくり出版する。
- ④作家自身が私費で出版する。このとき、奇篤な小書店が協力して印刷販売を助けることもある。
- ⑤文芸団体が出版する、例えばマレーシア作家（華文）協会が《作協文庫》の名で12冊を一連の文庫として出版した如きである。

出版量は1960年当時7千から1万冊出した例もあるが、これは例外中の例外で、1965年前後では3千冊も出れば好成績で、1975年以来1千冊から2千冊のものが多く、それを売り切るに

は2～3年を要するのが普通である。作家は事実上余業作家ばかりで、それも小中高の華語学校の教員が多い。これらの本が学校で学生に紹介推薦される機会があれば、販売量は大いに伸びる。また同郷会館など社団の文化部や青年部の文化サークルなどの推薦を得るのも大変有益である。会館は“華人は馬華文芸作品を読もう”の宣伝運動をすることがあるので、これも有力な応援になる。それで会館のこの種の文化活動は馬華文学の読者予備軍の育成にある程度の効果がある。このように苦心惨胆をして、本は売り出されるが、作家の印税収入は殆んど見るべきものはなく、作品ははじめに出版社に買いとられたり、若干の本を印税代りに作家に渡したりする。たまには印税が支払われることもあるが、支払いは大いに引き延ばされることが多い。何れにせよ、創作活動によって、作家が物質的利益を得ることは、まず望むべくもない。

単行本による出版はこのように難しいが、一般には新聞の副刊——日本の新聞の文芸学芸欄に当る——に載るものが多い。それに連載されれば、まとめて中篇や長篇になる可能性もないが、殆んどは短篇またお超短篇の形をとる。華字新聞は旧中国の新聞と同様に、この副刊の内容で各社は特色を出して妍を競う伝統がある。そして、旧中国の新聞と同じように副刊は多くの作家を育成し世に送り出す伝統がある。実際にシンガポールでもマレーシアでも、馬華文学作品の多くは新聞副刊の中から誕生したものである。尤も昨今の新聞の副刊は、大衆に迎合して、低俗読物や娯楽の時代小説に紙面をゆずる現象がめだっている。

マレーシアの新聞の文芸副刊の現状は次のようなものである。

- (1) 南洋商報：《諸者文芸》毎週三回、もとは全頁を使ったが現在は三分の一頁に縮小。
- (2) 星洲日報：《文芸春秋》毎週三回、日曜日は全頁、他の二回は三分の二頁。
- (3) 星檳日報：《文芸公園》三週間に一回ずつ全頁。この他に毎週一回半頁の《星芸》がある。

(4) 光華日報：《新風》、毎日半頁、この他に毎週一回半頁の《青年時代》がある。

(5) 通報：《文風》毎週一回見開き二頁。

(6) 中国報：《展望》半頁。(週何回か未詳)

(7) 華商報：《大千世界》毎週二回全頁。

人口300万の華人社会にとってはこれだけの発表の場では充分ではないかも知れないが、決して少な過ぎることもない。

マレーシアにはこの他に文芸的な雑誌として蕉風出版社——社長姚天平氏——の《蕉風》、マレーシア作家華文協会——主席方北方氏——の《写作人》、MCA系のマレーシア華人文化協会——責任者趙自新氏——の《文道》をはじめ若干のものがあるが、雑誌類は些か少ないと言わざるを得ない。

マレーシアには上記の他に次のような文学団体がある。

(1) 南マレーシア文芸研究会：10年の歴史があり馬華文学の推進に努力している。

(2) 天狼詩社：現代文学に熱心な団体で研究会や出版活動がさかんである。

(3) マレーシア華人文学協会：研究活動がさかんで、月刊の《文覚》を出している。

(4) 劇芸研究会：戯劇の研究をする一方、自ら話劇(新劇)の上演もする。但し姚天平氏の説ではこれのレベルは余り高くない。

その他に多くの社団、例えばジョホールの中華公会、福建社団連合会、南洋大学校友会をはじめ各種の団体が文学賞、出版援助金などを出している。ペナンの光華日報は創立七十周年を祝って《東南アジア短篇小説コンクール》を行ったが多額の賞金により大きな反響を呼んだ。その他《世紀文芸叢書》や《棕櫚叢書》があるが、このような活動は特記に値する。300人の会員を擁するマレーシア作家華文協会は既に13冊の作協文庫を出しているが、作家たちは、出版を阻む悪い条件に負けず、個人的な困難を克服して出版をしている。クアラルンプルで、特に熱心な出版社や書店の社主と懇談もしたが、単純な利益観点だけでは解釈できない彼らの作家と一体となつての活動を眺めて、筆者はマレ

ーシア華人社会の中に生れつつある新しい価値観、即ち文化活動に賭ける一団の人々の情熱に着目をするものである。

若い作家たちと膝を交えて懇談したが、そのときに聞いたところでは、マレーシア全体の立場から見ればマレー人、インド人、華人を含めた文学活動があるが、マレー人の作品は文部省直轄の言語図書研究所の奨励を受けており、この機関が発行する文学月刊誌としてデワン・サストラがある。民間団体としてはマレーシア文芸家協会（ガペナ）がある。毎年文学コンクールが行なわれ受賞者は賞金は勿論その他生活上の特権的優遇が与えられる。しかし、華文文学は目下、それらの政府次元の文学奨励措置の圏外におかれている。

現在マレーシアの文学には次の格付けがある。(1)国家文学：マレー人がマレー語で書いたもの。

(2) マレーシア文学：非マレー人（華人、インド人、英人）がマレー語で書いたもの。

(3) 移民文学：華人、インド人、英人のマレーシア公民が自己の母語を以て書いたもの。

華人作家達は公民たる彼らの作品をせめて(2)の格付けに置かれることを望んでいるが、現実には(3)の屈辱に甘んじている。本来、思想の領域に属する文学活動において、権威による格付けなど歯牙にかけるにも値しないとは思われるが、多民族、多言語の複雑微妙な要素が錯綜するマレーシアでは、このようなことも重大な意味をもって来ると思われる。

筆者はマレーシアの若い華語文学作家と、印象深い懇談を重ねたが、ある作家は華人作家の置かれた立場を、アメリカの少数民族黒人に譬え、黒人がそうした如く、われわれも自己の根を知りたい、自己の尊厳を守りたい。尊厳を守るために自らの文学を創りたい、と心中を吐露した。少数派の論理である。この数十年の間に世に問われた馬華文学の作品の量は既に観る可きものがある。筆者がこれまで読んだ量は僅かであり、個別の作品について所見を述べるには少し早や過ぎるが、敢て若干の初歩的印象を述

べて見たい。

新文学の伝統に基づけば、小説を創ることよりも詩を創る方が難しい、雑文は更に難しいといわれる。これは技術についてよりも、思想的な修練を必要とする意味で言われていることである。ところが最近の馬華文学では、散文——雑文に大きな成果があると考えられる。われわれ日本人が読む場合、まずマレーシアの地方的色彩、華人社会のしくみ、習俗、難しい民族問題などが描かれているときは大いに興味と関心をひく。その意味で典型的な作品は方北方氏の長篇《頭家門下》であろう。われわれにもよくわかる東洋道徳と、異郷趣味豊かな環境を組み合わせたこの作品は、現地華人の商業人社会の深奥部を形象化して剩す所がない。この一書は創作であると同時に一篇の華人社会学入門書でもある。裸一貫の主人公は如何にして巨富をもつ事業家に成長するか、殖民地社会の下、或は戦乱の中で人々はどのように浮沈したか、家庭の秩序を守る理念儒教は現地ではどのように変形し発展するのか、事業家の生活理念とはどんなものか、事業家の死は周辺に如何なる余波を及ぼしたか、《頭家門下》はそれらに触れた一篇の社会小説である。

また例えば伍良之の散文や原上草の小説は、無知、陋習にさいなまれる華人社会の暗黒面を鋭く暴き出し、商業にかたよる華人社会の精神的病根を明らかにし、改革を訴えている。詩人孟沙は華人商業社会と最も縁うすきものの“清純”の精神をうたっている。姚拓は自らも創作する一方で雑誌“蕉風”を通じて外国文学の紹介に尽している。丁雲はジャングルの奥にある飯場などを舞台にしながら、文学主義を貫ぬこうとしている。ここに述べたのはほんの一人か二人の例に過ぎないが、筆者が面接したとき深い印象を残した人たちである。

馬華文学は中国新文学と同じく、純文学かどうかといった権威的な差別をしない。また文以載道の伝統を承け、散文・詩・小説を問わず文学に対してあらかじめ目的や任務を用意する考え方が強いが、また文学の為の文学——これを文

学主義といっている——の立場を守る人が近来急速に増えており、研究者によっては若い作家の大半はこの部類に入るといふ説もある。創作活動では生活を維持できず、経済的には何の利益も得られない、商業理念支配の華人社会で、世俗的な利益を全く捨て、敢えて文学に挑む人々は、文以載道であろうとなかろうと、使命感を意識しようとしまいと、すべてひとむかし前の日本の文学青年にも似たひたむきな殉教者、前衛的存在である。これは華人社会の精神生活を担う人たちであり、華人社会にとって貴重な財産といわねばならない。

馬華文学も他の文学と同様に、特定の時代、特定の地域に存在し、時が来て歴史的役割を果たしてしまえば、歴史の舞台から消え去るもの——歴史的範疇——である。馬華文学のはじまりは大体1920年前後で、個人的な譬喩を用いれば、その歴史は筆者の人生と概ね重なるに過ぎない程の短いものである。マラヤ大学の呉天才氏によれば、馬華文学のはじまりから、およそ五十年の間に出版された本の概数は、①詩歌192冊②散文・雑文210冊、③小説400冊、④戯劇48冊、⑤評論研究45冊、⑥詩文集、寓言など62冊、⑦文芸叢刊66、⑧文芸雑誌100種といわれる。この他に、前記の新聞副刊に載せられた文芸作品の量はどれほどになるのか、数量的にはとても表わし得ない。これらのすべてを併せて多いと見るか少ないと見るかは見解の相異に帰するほかはないが、中国本土、香港、台湾などから、大量の出版物が流入する中で、これだけの独自の出版活動をした事を筆者は評価する。

馬華文学は母体たる華人社会の生成発展を反映して、社会と共に成長して来た。華人社会が流動的労働力を主軸にする社会から土農工商を持つ社会に変わり、定着した移民社会として発展を進めるに及び、この社会には伝統的な読書人の階層が誕生し、これら士大夫の読書人の存在は馬華文学を長足に進歩させることになった。

マレーシアの華人社会は今後さらに発展し変貌するであろうし、またマレーシア国家全体の政策の一環として、強力な言語政策が推し進め

られるだろう。言語と文学は絡み合いつつ、マレーシアの華人社会を前に推し進めるために作用し、再び以前の姿に戻ることはないだろう。

馬華文学の前途もこのような前進の中に自己の進路を見出すほかはない。

既に述べたように、華語をめぐる状況は、本来善良で正直に暮して来た華人に対しても容赦なく不利な展開を示している。しかし、筆者の見解によれば全く絶望的ではないことも既に述べた通りである。

馬華文学の担い手はやはり士大夫であるが、この士大夫の中のある部分は将来マレー語もマレー人に負けぬ位に自家薬籠中のものにしよう。すべての期待は華語を失なわない華人公民の高級知識分子の上かけられる。マレーシアの隣りには190万の華人が住むシンガポールがあり、そこでは一定の枠の中ながら華語が建在で、シンガポール華文文学が発展し続けるであろう。この点で、マレーシア華人の境遇はインドネシアやフィリピンの華人とは本質的にちがう。

マレーシアの華語を失なわない高級華人知識分子が、依然として華文文学を鑑賞する力と創造力を保持するならば、華語文化はマレーシアで一定の生存圏を確保するであろうし、未来のマレーシア国家は究竟的にこれを無視することはできないであろう。ある特殊特定の文化として、マレーシア全国民の生活の中に、それは一つの場所を与えられるであろう。健全な華人社会の存在が、マレーシア国家にとって確かに有利であることを、マレー人が知るような時が来れば、またそうなるように華人が努力すれば、華語文化や馬華文学も一つの枠の中で存立の可能性を失なわないだろう。

馬華文学の将来がどうなるかを決めるのは、馬華文学自身だけではなく、それを存在させる基盤、華人社会とマレーシア社会の今後の歴史などが決めることである。

筆者は特に華人に左袒するものではないが、実際に現地で調査を積み重ねた結果、馬華文学

の未来は決して絶望ではないと思うに至った。

5. 結 語

マレーシア華人の言語生活や精神生活に対する最大の関心事は、マレーシア社会において、法的保障のない華語の地位に、何らかの改善措置を加え、華語の地位を安定させることができるかどうかということである。また、華人は今日のようなマレーシア政府の施策のもとで、近い将来には華人子孫の華語漢字文化の水準が低下し、遠い将来にはそれらが消失するのではないかという危懼を抱いている。華語問題の危機的様相は学校教育体系の中での華語の地位、授業時間数などにおいて具体的に表われている。現在官公立学校教育体系の中で、華語は重大な困難に面している。特に1961年の教育法令21条B項の存在は、華語の危機を招来する要因となっている。

独立中学は、マレーシアの学校教育体系の枠外に置かれ、マレーシアの教育事業の中での統計数字の中からも姿を消すに至った。それにもかかわらず、華人社会は独立中学の維持と発展に執念を燃やしている。一度は華語学校教育体系を小中高校から大学に至るまで整えようとして、独立大学の設立申請を行ない、これについての訴訟が長く続けられたが、このほど独立大学側の敗北に終わった。

独立中学には華語系小学校の卒業生が入学するのであるが、華語系小学校とは華語源流の国民型学校に他ならず、若しも国民型学校での華語教育が皆無になった場合、独立中学は学生の来源を失うことになる。先述の“21条B項”といい“独中学生の来源問題”といい、華語教育の死命を制する要点は完全にマレーシア政府がおさえている。華語教育をめぐる諸要因のうち、この二点が最も重大であることを筆者は明らかにした。

華語問題は華人社会にとって至上の重要問題であるが、これに対応する華人指導者は会館派グループとMCA派の対照的な二派に分裂し、これまでマレーシア政府に対して一致団結して

当った事は少なく、両極の分裂が華人社会の力を相対的に弱めたのは確かである。本報告はこの点も明らかにした。

華人社会指導層の分極化現象は、華人社会の倫理価値観の上での分裂現象の反映であるが、この二つの勢力の中に新しい世代が出て来たことから、この両極は一時ほどの対立がなくなり、両派は徐々に近づきつつあるようである。筆者の見通しでは、ある程度の時間をかければ、両極は更に接近し、最後には合流するものと予測される。何故ならば、イギリス植民地時代の特定条件下の産物として、この両派はそれぞれに生成発展したが、今日は植民地時代ではなく、従って特定条件もなくなったからである。事実英語教育出身の華人グループも、再び華語・漢字文化を再認識しはじめているようで、会館派華人の若い指導層は特にそれを評価し歓迎している。換言すれば、これは両派の華人が倫理的価値観の上での距離を縮めはじめたのであり、特に昨今シンガポールのPAP政権が強力に“儒家思想推進”に立ち上ったことは、その意味で甚だ象徴的な事だと筆者は考える。本報告はこれまで余りなされなかった華人社会の意識形態上の分裂現象と再合流的傾向についての検討をし、更にシンガポールの“儒家思想運動”の本質に論及し、この運動の歴史的な意味を明らかにする端緒をつかんだわけである。

マラヤの数代子孫ババやMCAの創始者たちは華人が故郷を離れて、多民族多言語国家のマレーシアに根を下した結果どのような新しい華人が生れるかの可能性を示したものであり、今日の一般華人はその中に否定面とともに肯定すべき面も認めている。しかし、今後はこれらを超えた新しい可能性についても意識的に考えなければならないだろう。

今日の現実に戻ると、華語をめぐる事態は決して華人を満足させる方向に進展しているわけではない。華語の将来については二つの可能性を予想することができる。そのうちの一つは、華人が華語を失う方向で、もう一つは現状の延長線上に命脈を保つ場合である。前者の場

合にも、華語が完全に消滅することは考えられない。大陸香港台湾及びシンガポールの華語漢字文化圏に挟まれているので、華人読書人層には文化教養としての華語は生き続けるであろう。この場合、筆者は華人社会に新たに発生した読書人階層の存在を特に重視するものである。

次に馬華文学については、筆者はこの文学が華文文学として1920年前後にマレー半島に興ったのは事実だが、その後の歴史的発展により、今日ではマレーシア華文文学とシンガポール華文文学の二つに分かれており、その結果異った国家、異った環境の下でのちがった華文文学として発展する可能性があり、今日すでにそのちがいは現れつつある点を主張した。

馬華文学の歴史的発展の時期的区分について見ると、諸説を通じて共通の点は区分の仕方が比較的に小刻みなことであるが、これはこの地域の歴史的変化が甚だ急劇であったことを反映したものである。方修氏は相対的な社会激動期に作品は多産となり、安定期には低潮となるとし、また楊松年氏の時期区分は時代とともに僑民色が濃から淡に変わり、同時に現地独自の地方色が淡から濃に変わる“吾土吾民”の成長過程の反映として馬華文学史を区分している。筆者はこの両氏の観点に啓発される所が大きい。

マレーシアには呉天才氏を中心とするかなり強力な馬華文学理論研究陣と馬華作協を主とする作家陣がある。作品も大いに見るべきものがあるが、上述の方修氏の方法を援用すれば、今日のマレーシア華人はさまざまな不安と激動の時期にあるのだから、文学的に高潮期を形成しなくてはならないと期待される所以である。作家は時代を先取りするものであるが、方北方氏の《ペナンの72時間》はマレー人と華人の和合を心から期待する華人の良心を反映したものである。また梁良貫氏が《路過文冬嶺》に収めた《相識和不相識》はじめ諸散文なども、高い立場に立って民族和合の原理を説いたものとして注目される。

さて筆者は文学は人類が社会の中で営む行為で、さまざまな関係者の協業の結果成立するも

のと考える立場に立つ。そこでその角度から調査活動に時間と労力を費したが、新馬両国のような文学的發展途上国では特にこの方面の総合的調査研究が必要であると痛感した。クアラルンプルの小さな書店長青書屋は作家の個人的出版に力を貸していたし、友聯出版の姚天平氏も利益を越えて作品の発掘に努めている。また新聞社は副刊のよしあしで部数競争をしている。人口300万の華人社会の持ち得る文学作業集団の大きさには限りがあるだろうが、この集団はそれぞれの業種業態を通じて一致団結して、自己の文学を生み出す努力をしている。筆者はこのような協業集団による作業として分析する新しい手法で馬華文学を研究している。この方法は馬文学研究には特に適するものと見ている。

避けて通れない問題として、華人大衆の中国大陸への心情のあり方がある。それに続いて華語問題や馬華文学運動を語る人々の心情に、中国大陸がどれほどの心理的影響を与えているかの問題があるが、正直なところマレーシア国内での言語問題、種族問題が余りにも激しいので、中国大陸問題を持ち出すといまもないのが実態ではあるまいか。マレーシアで中国大陸が話題になった事は少ない。なお、この国では華人の老人世代に限り国内に親兄弟が健在の場合、中国訪問が許されている。

筆者は多数の馬華文学関係者と懇談したが、一人の作家が“人間としての尊厳を守るために華文作品を創作する”“華文文学は華人のアイデンティティーの確認の為のよき手段である”“アメリカの黒人に自己のルーツを求めて創られた作品があるが、いま華人は同じく自己の根を探し求めている。それが華文文学の一つの精神”であると述べたのは印象的であったが、真情を吐いたこの一言を紹介して本報告のしめくくりとしたい。

6. 参照・引用資料

1. 中国語概論 藤堂明保著 1979. 5. 15
2. Dr. MAHATIR BIN MOHAMMED, THE MALAY DILEMMA, 1970

マレーシア華人の言語と華文文学の調査報告

3. 方修著 馬華新文学史稿 上, 中, 下 1962. 2.
4. 賴觀福主編 馬華文化探討 1982
5. VICTOR PURCELL著 THE CHINESE IN SOUTHEAST ASIA (東南亞之華僑) 郭湘章訳 1965
6. 陳烈甫著 東南亞洲の華僑・華人与華裔 1979
7. 苗秀著 馬華文学史話 1968
8. 楊松年著 新馬華文文学論集 1981
9. 方修著 馬華新文学簡史 1974. 7
10. 吳天才著 馬華文芸作品分類目録 1975
11. 山本哲也 馬華文学とその作品について(論文) (雑誌中国語) (時期不詳)
12. 小木裕文 馬華文学と中国作家(論文) (時期不詳)
13. 桜井明治 文学にみるシンガポール華僑社会相(論文) アジアレビュー 1976春
14. 高沢裕之 マレーシアの言語事情と文芸活動(論文) アジアレビュー 1975. 2
15. 方修著 馬華新文学とその発展過程(論文) 田中宏訳 1973
16. 姚天平 二十年来的新馬華文文学(論文) (時期不詳)
17. 方北方著 馬華文芸泛論 1981. 4
18. 原上草著 水東流 1981. 4
19. 孟沙著 四重奏 1981. 9
20. 伍良之著 冷眼集続篇 1979. 3. 30
21. 梁良貫 路過文冬嶺 1976. 3. 1
22. 原甸著 香港・星馬・文芸 1981. 2. 24
23. 丁雲著 看山歲月 1981. 4
24. 黄孟文著 新馬文芸論叢 1979. 8. 15
25. 方修篇 馬華新文学大系 1972. 5
26. 方北方著 頭家門下 1980. 2
27. 方修著 馬華新文学及其歴史輪廓 1973年
28. 柏楊編 新加坡共和国華文文学選集(史料) 1982
29. 鄭良樹魏維賢 馬來西亞新加坡華文中学特別提要 1975. 12
30. 鄭良樹著 馬來西亞・新加坡華人文化史論叢 1982
31. 趙戎編 新馬華文文学大系(史料篇) 時期不詳
32. 参照新聞 星洲日報・南洋商報・光華日報 星檳日報等
33. JAMES C.C. YANG著 THE MALAYSIAN CHINESE IN A DILEMMA (馬來西亞華人的困境) 1982. 2
34. 方北方著 檳城72小時 1961. 11
35. 崔貴強・古鴻廷著 東南亞華人問題之研究 1978. 4
36. 大馬華人文化協會: 文道, 1980年1号~12号